

書道研究誌

書の光

12
2023

Vol.664
宮城野書道会

A photograph of a beach scene. The top half of the image shows clear, turquoise water with gentle waves washing onto a sandy shore. The sand is light-colored and textured. In the lower right foreground, a piece of dark, weathered driftwood lies on the sand. The overall atmosphere is serene and natural.

漢詩を味わう

第173回

飲酒 其二 元好問

去古日已遠 古を去ること 日々に已に遠く

百偽無一真 百偽 一真無し

獨餘醉鄉地 独り酔郷の地を余し

中有義皇淳 中に義皇の淳有り

聖教難為功 聖教 功を為し難く

乃見酒力神 乃ち見る 酒力の神

誰能釀滄海 誰か能く 滄海を醸し

盡醉區中民 尽く区中の民を酔わしめん

太古の理想郷から日一日と遠くなっていくがゆえに、
偽りが満ち満ちて一つの真実もない。

ただひとつ酔郷のみが健在で、
そのなかには伏羲氏の治めた理想郷の純朴なすがたがある。
聖人賢人の教えが役にたたなくなつてから、酒の力の靈妙不可思議さが目
立つてきた。

だれかあの大海原の水を醸造して酒にかえ、
世界中のすべての民を酔わしてしまふことはできないものか。

《義皇淳》 上古の帝王伏羲のこと。

《酔郷》 酒に酔うだけでよい理想郷。

《淳》 淳朴。

《聖教》 聖人賢人の教え。

《神》 人智を超えた不可思議さ。

《滄海》 大海。

《区中》 世界中。

元好問（一一九〇—一二五七）は金王朝の詩人です。金は満州出身の女
真族酋長だった完顔阿骨打によって一一一五年に現在のハルビン市に建国
され、一一二七年には靖康の変で宋を滅し、中国北半の支配地域として漢
民族を統治した異民族国家です。これにより宋は南渡して南宋となりま
す。一二三一年、蒙古族の侵略により金は滅ぼされ、中国史上で正当な国
家としてあつかわれませんでした。元好問は金王朝が中国文明の正統を継
ぐ王朝であることに全力を注ぎました。正史『金史』は元好問の没後約百
年後に完成しましたが、その多くの部分は元好問の原稿です。元好問は清
時代になって天才詩人として再評価され、杜甫の精神の継承者とも言われ
ます。

伏羲は中国の神話に登場する帝王です。同じく聖人君主として崇められた
堯舜とともに伏羲は古代中国の伝説上の名君として知られています。伏羲
以前の時代はすべてがみちたりてきわめて淳朴でのんびりとした理想社会
だったといえます。初唐の王積詩「酔郷記」では、大昔の中国に何の制約
もなくただのんびりと酒をのんでいた理想郷があったといっています。

酒は中国の漢詩には欠かせない存在で、酒を語らず、また飲まない詩人が
ほとんどいないと言われます。中国の歴史書『漢書』に「酒は天下の美
禄」とあり、神から賜ったものと書かれています。三国志に登場する曹
操は『短歌行』で「酒に対してまさに歌うべし、人生幾ばくぞ、憂思忘
れ難し——中略——何をもつて憂いを解かん、唯杜康あるのみ。」と詠つ
ています。杜康は農作業で食べ残した飯を穴に入れておいたところ、数日
経って飲むと美味い液体となつていて、これが酒の始まりで、杜康は酒の
代名詞となりました。元好問は大海原の水を酒にして、世界中を酔郷のよ
うな理想社会にしたいと詠っています。

過去の中国の儒教思想では、時代が下るにつれて世の中は退歩するとい
います。私たちは時代が進めば、社会的思想や文化が進化し理想社会に近づ
くという期待を抱きますが、世界各地で戦禍が起きている現状を見ると、
この期待は幻想に過ぎないという思いに至ります。それをできるだけ食い
止めることが為政者のつとめで、私たちの願いです。

参考文献・中国詩人選「元好問」（岩波書店）・漢詩体系「元好問」（集英
社）・漢詩の事典（大修館書店）

故歳今宵盡こさいこんしょう 新年明日來しんねんあしたきた 愁心斗柄しゅうしんとへいに隨まい 東北春回とうほくはるかえるを望のぞむ

故歳今宵盡 新年來明日愁心

隨斗柄東北望春回

《大意》今年も今宵で終わり、新しい年が明日の朝やって来る。愁いは酒と一緒に流し、東北からやって来る春を迎えよう。(張説詩・守歳)

鳥聲暮れうしづゑを催もよほして急いそに 山氣晴さんきれんと欲ほして寒ふし

鳥聲催暮急 鳥聲催暮急
山氣欲晴寒 山氣欲晴寒

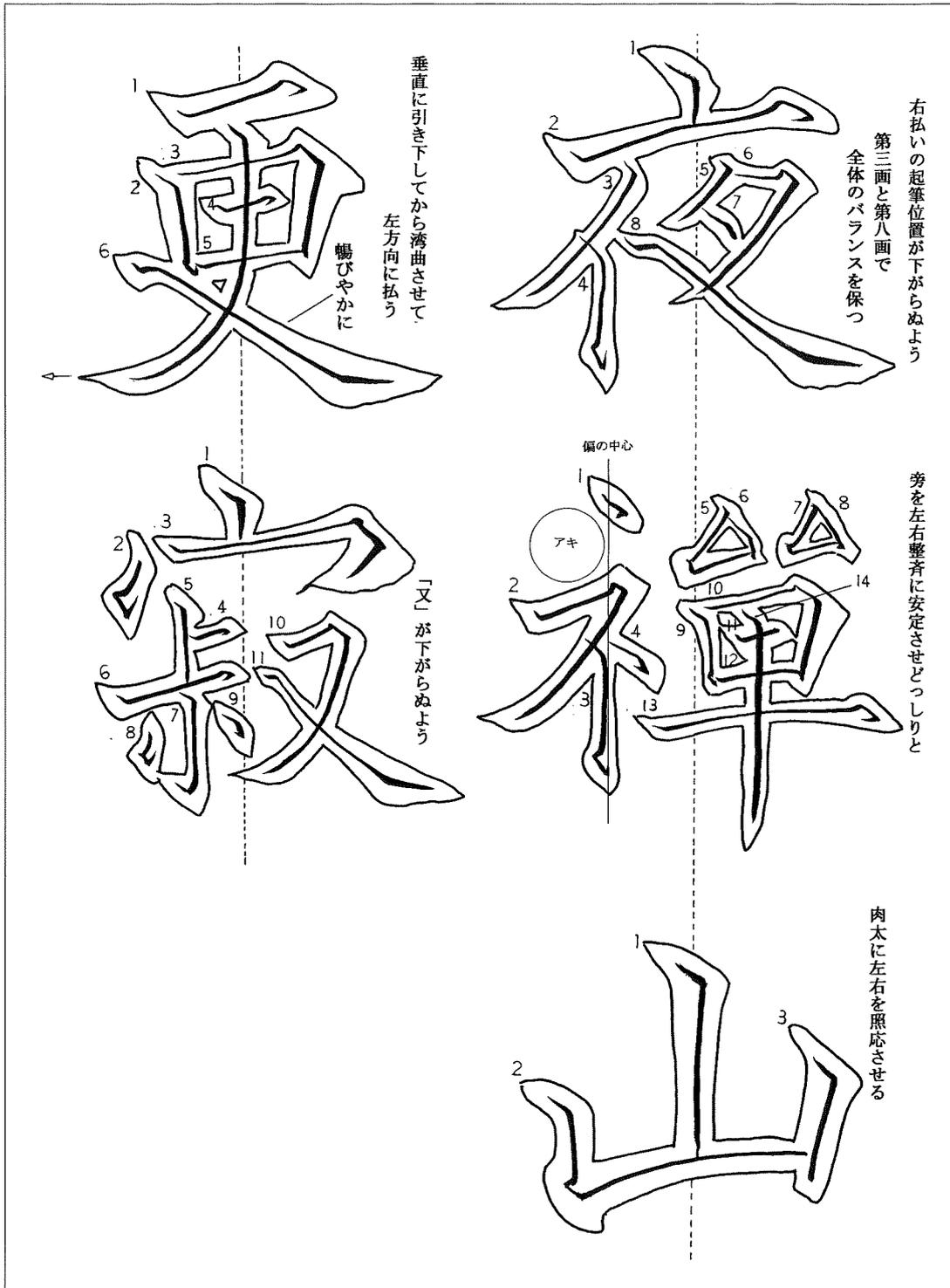
《大意》鳥は夕暮れになり騒がしく鳴き日が暮れるのを催促するようで、山の冷気は日暮れとともに俄かにつよくなる。(歐陽脩)

読み

夜や禅ぜん山さん更せいに寂せきたり
(夜、禅定に入れば山は一層静寂である)

夜 更
禅 寂
山

佐藤象雲書



一般部規定課題出品について
 ・規定課題は段級の区別なく、前頁掲載の五言句となります。
 ・初段以下の方に限り、前半二文字または後半三文字でも構いません。
 ・規定課題(楷書)の出品はひとり一点に限ります。

連月課題

王維詩

「藍田山の石門精舎」

(後半)

朝梵林未曙

朝梵 林 未だ曙けず

夜禪山更寂

夜禪 山 更に寂たり

道心及牧童

道心 牧童に及び

世事問樵客

世事 樵客に問ふ

暝宿長林下

暝に宿る 長林の下

焚香臥瑤席

香を焚きて 瑤席に臥す

澗芳襲人衣

澗芳 人衣を襲ひ

山月映石壁

山月 石壁に映ず

再尋畏迷誤

再び尋ぬるに迷誤を畏れたれば

明發更登歷

明發 更に登歴せん

笑謝桃源人

笑ひて謝す 桃源の人

花紅復來觀

花の紅なるとき 復た來りて觀はん

草書

行書

※成家・師範の随意作品出品は二点までです。

更寧
夜禪山

更寧
夜禪山

次号課題

隸書

牧童
道心及

更寧
夜禪山

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

(両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと)

支 部		順 位		氏 名	
暮れて行く年は身にそふ老なれど					
春まつ月のいそがしきかな					

鴨 長明

和泉 溪石 先生書

誅斬賊盜捕獲叛亡
 誅斬賊盜捕獲叛亡
 誅斬賊盜捕獲叛亡

佐藤 象雲書

音

チュウザンゾクトウ
ホカクハンボウ

略解

盜賊あらば斬つてしまひ
謀反者は捕らえて罰すること

日月無窮

日月(を將^もつて)窮まり無く

日月無窮

褚遂良・雁塔聖教序

(初唐・西暦六五三年)の臨書

(75)

象雲臨

『日月無窮』

インドなどの西域から多くの経典を持ち帰った玄奘は、西遊記などで三蔵法師の名で親しまれていますが、唐時代の大翻訳家です。長安に戻ってから一三三五巻の経典の翻訳をしています。が、訳語の統一をはかり原文に忠実なことから、玄奘以前の訳を旧訳とし、玄奘訳を新訳として区別されています。

皇帝から御製の序文を賜り、その経典の散逸を防ぐために、五層の雁塔を建立するという大事業で、その碑を書丹したのが褚遂良です。褚遂良晩年の練達円熟のこの書は、褚遂良の楷書の中でも最高傑作で、初唐の代表的な洗練を極めた楷書です。

今回で雁塔聖教序の臨書は最終回となりますが、さまざまな筆法が内蔵されている楷書の重要古典です。今後も折にふれて臨書してください。

神融筆暢

神融^と筆暢^の

■孫過庭・書譜（初唐・西曆六八七年）の臨書

象雲臨

『神融筆暢』

今月の課題は「精神がとき開かれ、筆も暢び暢びと動く」という意味です。同じように書いても時と場合により調子の悪い時があり、これを孫過庭は「乖」と言っています。逆に筆が自然に流れるように動く美しく書ける調子の良い時があり、これを「合」と言ってそれぞれ五つの理由を挙げています。調子が良い時の「合」の理由を五つのように述べています。

第一 神怡^{しんぎ}務閑^{むかん}なり

（精神がやすらかで、仕事に追われて

いない時。）

第二 感恵^{かんき}く絢^{じゆん}知^ちなる

（感覚が冴えて知力の働きが活発な

時。）

第三 時和^{じわ}き気潤^{きじゆん}う

（氣候がおだやかで大気が潤っている

時）

第四 紙墨^{しぼく}相^あい発^{はつ}する

（紙と墨がよく調和する時。）

第五 偶然^{ぐうぜん}書^かせんと欲^{よく}す

（ふと書こうという意欲がわいた時。）

以上の条件ですが、このようなことは昔から変わりありません。調子の良くない時については、気持ち慌ただしい時、心にわだかまりがある時、空気が乾燥して日が照り付ける時、紙墨の調子が合わない時、そして最後にものうくて手がいうことをきかない時。の五つを挙げています。